

小林保健所におけるアルコール依存症対策の取組 ～「家族教室」開催を通じた宮崎県断酒友の会との連携～

○小園郁美¹⁾、小野智美¹⁾、高藤ユキ²⁾、和田陽市²⁾

都城保健所¹⁾、小林保健所²⁾

1 はじめに

西諸地域は全国及び県と比較し、1日あたりの飲酒量が多い地域である¹⁾。当所では、平成10年よりアルコール家族教室(以下、教室とする)を開催しており、県内保健所の中で開催継続しているのは当所だけである。教室開催は、宮崎県断酒友の会(以下、断酒会とする)と連携した人材育成や訪問支援の取組へ発展している。今回、令和元年度から令和5年度に行った断酒会との取組を振り返り、連携の効果と意義を考察したので報告する。

2 事業概要

【アルコール家族教室】

＜目的＞アルコール健康障がいに関する知識の習得及び参加者同士の交流

＜参加対象＞アルコール健康障がいに悩む家族や知人、アルコール依存症当事者

＜周知方法＞市町広報紙、関係機関への周知及び周知依頼、宮崎県HP等。また、保健所に相談があったケースについては、積極的に教室参加を促す。

＜開催場所＞当保健所会議室

＜開催内容＞毎月1回開催。司会進行は保健師が担当し、保健師による講話とクローズドミーティングを行う。講話資料は、特定非営利活動法人ASK発行のミニガイド、季刊誌等を活用し、内容は家族向け、当事者向けを交互に取り上げる。ミーティングは、参加者が順番に気持ちや講話の感想等を自由に話す。また、参加希望の支援者や学生がいる場合、教室参加者の了承を得た場合に、参加を許可する。

【アルコール家族教室オープンミーティング】

＜目的＞アルコール健康障がいに関する知識の習得及び教室や断酒会活動の周知

＜参加対象＞小林看護医療専門学校生や一般住民、支援者

＜開催場所＞小林看護医療専門学校

＜開催内容＞年1回開催。専門学校の講義の1コマ90分を利用。保健師による講話及び当事者及び家族の体験発表(1人20分程度)を行う。体験発表者の選定は、教室参加者(断酒会)との話し合いで決める。

【訪問支援】

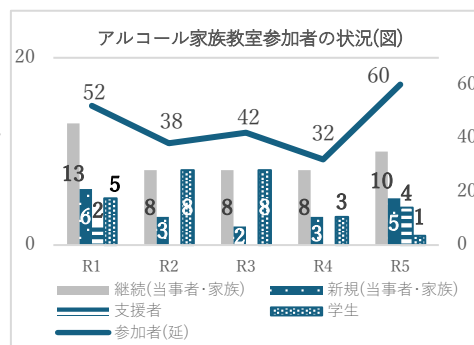
＜目的＞アルコール健康障がいに悩む本人への受診勧奨

＜訪問までの流れ＞家族等からの相談を受け、本人へのアプローチが可能であれば、教室参加者(断酒会当事者)との同行訪問を調整し、訪問を行う。

3. 結果

【アルコール家族教室】

参加者内訳は右図のとおり。延参加者は224名であり、そのうち家族97名(43%)、当事者83名(37%)、支援者19名(8%)、実習看護学生25名(11%)であった。新規参加者の内、3回以上参加者は家族3名、当事者0名であった。3回以上参加者は、断酒会へも参加していた。新規参



加者の参加経路は、表 1 のとおり。新規参加者の内、4 事例が専門医療に繋がった。アルコール健康障がいに関連した薬物やアダルトチルドレンに悩む当事者、ギャンブルに悩む家族の参加者もいた。支援者では、市職員、精神科病院職員、他保健所職員の参加があった。参加理由は、支援家族と一緒に参加、教室の場を知り、今後の支援に活かすためであった。令和 2～4 年度は、コロナ渦の影響により未開催月があり、参加者が減少した。

新規者の参加経路(表1)	
断酒会	6
病院	3
当保健所	3
家族に誘われて	3
市保健師	2
AA※	1
チラシ	1
合計	19
※アルコールの自助グループ	

【アルコール家族教室オープンミーティング】

専門学校生を中心に、45 名程度/年の参加があった(令和 2 及び 5 年度は、コロナ渦や他事業との関係で未開催)。参加者アンケート結果(回収率 90%以上)では、参加者 85%以上が参考になった回答しており、体験発表に対し「やめたくても身体が求めてしまう依存症の怖さを改めて感じ、当事者や家族の辛さを知れた」「自分の中に“依存症は、意思が弱いものになる”といった偏見があった。原因や背景を捉え、相手に寄り添える看護を行いたい」「アルコールとの付き合い方を考えたい」といった感想が寄せられた。また、「私の家族は依存症かもしれない(依存症です)」とアンケートに記載される学生が数名いた。

【訪問支援】

アルコールに関する訪問 41 件の内、断酒会と連携した事例は 3 件(7%)であった。3 件の内、1 件が専門治療に繋がった。

4 考察・まとめ

アルコール依存症は、飲酒運転等の社会的問題をはらみながらも、専門治療に繋がる事例は少なく、治療に繋がったとしても、その後の断酒継続は長期に渡る。その様な中、断酒会と連携した結果、得られた効果や意義は下記のとおりだった。

(1) 断酒会の経験則に基づく語りは、依存症に対する捉え方や接し方を変える効果がある。

実際に、家族からの相談を受け、断酒会と介入した結果、専門医療へ繋がる事例がある。

(2) 毎月開催の教室参加に繋がれば、断酒会への橋渡しが可能となる。新規参加者の定着率は低い現状があるため、今後、教室では、家族支援から本人登場までの取組を、仲間の存在を大切にする断酒会では、治療・断酒継続の取組を重視していきたい。

(3) 未治療者・再飲酒者への支援として、断酒会との同行訪問を行うが、訪問を希望する家族は少ない。まずは、教室等の場で、家族が思いを表現出来るようにし、家族と本人との関係再構築の過程を支援したい。訪問の場では、教室等の情報を届けると共に、断酒会の共感力を活かした本人との関係づくりを目指している。支援者自身が、本人対応に困難感を抱きやすいため、断酒会と共に対象を捉え、支援出来る意義は大きい。

(4) 看護学生へのアプローチは、予防教育と同時に将来、医療従者としての早期発見・早期介入の役割が期待される。支援者側の対応力向上を目指し、新たな取組として、勉強会や集会等の場へ断酒会等の講師派遣を行う“こころの健康出前講座”も始めている。

(5) 最近では、ギャンブルに関する相談が増えており、断酒会から「本人の生きづらさや家族の苦労は共通する。近場で参加出来る場を求め、断酒会にも来る」との意見を受け、ギャンブルに悩む家族の教室参加の対応を行った。今後も教室が地域の社会資源となるよう改良を重ねていくと共に、断酒会が、自らの健康問題の回復から地域の健康問題の解決を目指していく過程を支援し、協働していきたい。